

Title	米国自動車製造企業にみる国際化過程の分析
Sub Title	
Author	伊藤博史(Itou, Hirofumi) 小林規威
Publisher	慶應義塾大学大学院経営管理研究科
Publication year	1980
Jtitle	
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	複写許諾が必要
Genre	Thesis or Dissertation
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00001980-0066">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00001980-0066</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

学生氏名 伊藤博史 主査 小林規威 教授  
(株式会社 小松製作所) 副査 柳原一夫 助教授  
所属ゼミナール 小野桂之介 研 小野桂之介 助教授

## 生産体制国際化過程に関する研究

### 一 GM, フォード両者の海外進出行動の分析を中心として 一

今日、我国の産業界においても、すでに国際市場を対象とした輸出段階を経て、広く海外に生産拠点を求めようとする企業が数多く現われてきている。しかしながら、多くの産業分野において、これらの企業の行く手には、既にかかなりの程度国際的な生産拠点の整備を遂げた巨大企業（多くは欧米系）が今後の主要な競争相手たるべく存在している。「敵を知り己を知らば百戦危うからず」という古来からの言を待つまでもなく、今後生産体制の国際化を図る我国企業にとって、これらの巨大な競争相手の行動、とりわけその国際化行動を理解することは重要な課題である。本研究では、自動車産業を例として取り上げ、同産業の主たる巨大企業（GMとフォード）の国際化行動について事例研究を行なった。

研究作業としては、まず、R. Vernon のプロダクトライフサイクル論を中心として生産活動の国際移転に関する文献研究を行なった。次いで、GM, フォード2社の過去半世紀余にわたる海外進出行動（生産体制国際化行動）を調査し、両社それぞれの海外進出行動の方法性を探ると共に、両社の比較分析を行なった。さらに、ここで発見された両社の行動に見られる方則性が既存の理論（特にR. Vernon の理論）と斉合するものかどうかの検討を行なった。そして最後に以上の検討結果が、これから本格的な国際化段階に入ろうとする日本企業の戦略に与える意味について若干の考察を行なった。

以上の研究作業の結果次のような諸点が明らかにされる。(1) 自動車産業における巨大企業（GMとフォード）の生産体制国際化行動にはいくつかの共通した方則性が見られる。(2) これらの方則性の中には、R. Vernon のプロダクトライフサイクル理論と斉合するものであるが、同理論では説明されないものも含まれる。(3) 今後本格的国際化段階に入る日本企業にとって、これら先駆企業のこれまで採ってきた行動原則が全て妥当性をもつとは限らない。